

# 子どもたちを食べ物が育つ土で遊ばせたい

俳優 永島敏行さん

## 東京湾の恵みに育てられた

僕は、千葉市の海辺で生まれ育ちました。両親が営む旅館は、海が近く湿気対策のためでしょう、床下が三尺もありました。建てられてから八〇年は経っているのが古民家のよなものです。縁側が好きでしたね。庭にはカニが住んでいて、学校に上がる前はカニが遊び友達でした。

いまは埋め立てられていますが、子どもの頃は遠浅の海が続いていて、潮が引くと海の中を六キ口近く歩いていけた。



アサリをとってきて味噌汁に入れたり、食卓には東京湾の海の幸が並びました。海苔、イワシ、アジなどの小魚、それにヒラメ、カレイ、ワタリガニ、エビ類……、みんな地元のものでした。

いまの東京ではいろいろなものが食べられますが、自分が何を食べて育ってきたかがわかりにくくなっている。自分の生命を支える食べ物との距離が遠くなっているのではないかと思います。

海も暮らしから遠くなった。銀座からは一〇分ほどで海に出られますが、ここで獲れ

た食べ物を口にすることも、子どもたちが遊びに行くことも、まずありません。土も遠くなった。公園に土はあっても、食べ物を育てる土ではないですよ。

夏になると、岬にある親戚の家に遊びに行きました。元は網元の家だったという所も、やはり、床下は三尺。高台に建つ灯台のような家で、海が遠くのほうまで見えました。

子どものころの体験で、その後の生き方が決まっていくような気がします。僕は、感性も含め東京湾の恵みに育てられたと思っています。

## 永島敏行（ながしま・としゆき）

1956年、千葉県千葉市生まれ。俳優として、映画、テレビ、ラジオ、舞台と幅広く活動。中学から大学まで野球部に所属。映画『ドカベン』でデビューし、1978年に主演した『サード』で新人賞を多数獲得。

1995年に千葉県成田市で「永島敏行稲作り体験教室」を開始。2005年に有限会社青空市場を設立。現在、「産地発！たべもの一直線」(NHK)の司会も務めている。

## 漁業や農業に携わる人たちのすごさ

これまでの町づくりというのは、海や土と人間との距離を遠くしてきたのではないのでしょうか。

僕は民俗学者の宮本常一さんを尊敬しています。宮本さんが日本全国を歩き調査されていた頃は、野菜や米が育っている土で子どもたちが遊んでいました。そうした時代を取り戻したいという思いもあります。

宮本さんの本を読んでいると、市井の人たちの強さというか、すごさに気づかされます。

ああ、この人たちの連綿とした歩みがあって、僕たちの暮らしがあるんだなど。宮本さんは、日本各地を歩き通し、たくさんの人に暮らしのようすを取材されていますよね。僕たちも、自然とともに暮らしている漁業や農業に携わる人たちのすごさをいろいろな活動を通してもつと伝えていく必要があると思っています。

僕は、野菜や海産物を生産者の方たちが持ち寄り都会の消費者が購入する「青空市場」を開いています。二〇〇四年から月一回開催し、この九月で三三回になります。リピーターも増えてきているんですよ。自分でも五反の畑を借りて野菜づくりをしています。

「スクーリング・パッド」という専門学校で農業ビジネスデザイン学部長というのにも引き受けています。受講生は、若い人がほとんどなんです。彼らが、会社の仕事以外に世の中の役に立てないか、出身地域のために何か力を貸せないかと話すのを聞いているうち、僕も何かやりたくなった。青空市場が地方の生産物を紹介する窓口になれば、と思っています。

長く住み継がれてきた民家は、生き物のような感じがします。世話をしていくには、外の地域からの目や若い人たちの視線が大事なのではないでしょうか。長くそこに住んでいる人にはよさがわかりにくいからです。暮らしが営まれている古民家はとても人間くさくて魅力があります。里山の曲がりくねった農道やていねいに石を積み上げてきた棚田などもそうですが、日本の素晴らしい財産。地域の歴史や文化が詰まっています。

そうした家には人が集まり、「井戸端会議」が始まります。そんな交流の場もつくりたいものです。